

ヒールは  
反逆の音を  
鳴らす

20260604

エリー



—



# 目次

本文 .....	1
----------	---



## 本文

カチカチカチカチ。

アナログ時計が秒針を刻んでいく。午後5時まであと30秒。

明日のために必要な書類を確認して、引き出しにしまう。

あと3秒。

「牧子くん、ちょっといいかな」

社長の虎雄が書類の束をわたしの机の上にドサッと置く。

「なるべくはやく情報をまとめてほしい」

ささっと書類に目を通す。どれも古いデータで、今すぐまとめる必要性はない。なぜ、今、このタイミングで持ってきた？

虎雄の本音を探るべく、目線を合わせ、瞳に映るナチュラルメイクの自分を見つめた。

1、2、3、4、5。

目をそらすまで5秒かかった。

虎雄もまた、探りを入れているのだろう。

なにが、知りたい？

虎雄の目線の先には、女性らしいヒラヒラしたスカートの裾がある。さらに下へ向かうと、黒いストッキングに包まれた、白いふくらはぎが透けて見える。

虎雄の視線に気づいたわたしは、洗面という舞台裏で隠すメイクを、わざわざ自分の席で始める。

魔法の七つ道具を出すように、丁寧に鞆から化粧ポーチを取り出す。

虎雄が、口を半開きにして、目を見開き、変わっていくわたしを見ている。

ファンデーションで肌の質感を整え、目元に陰影をつけ、ほほ紅を塗る。

そして最後に真っ赤なルージュを引き、軽くティッシュで押さえ、ゴミ箱に捨てた。

立ち上がり、退社しようとするわたしに気圧され、虎雄は情けない声を発した。

「な、なるべく早くだぞ！」

右手に顎を乗せ、首を傾げて、考えるフリをする。

「はい、な・る・べ・く、はやくですね！」

軽い会釈のあと、会社を悠然と出た。

背後から聞こえる、書類を投げる音に、カツカツと響くヒールの音で返事をした。

---

ヒールは反逆の音を鳴らす 20260604

---

著者 ELYE

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---